INTERNATIONAL MRA ASSOCIATION OF JAPAN

IMAJ

㈳国際MRA日本協会機関誌

ニュース
NO.81

発行年月日　1996年8月1日
発　行　所　㈳国際MRA日本協会
〒113 東京都文京区千駄木5-49-2
ベガハウスミタケビル102
TEL.03-3821-3737
FAX.03-3821-6479
発　行　人　住友　義輝
編　集　人　加藤　保之
頒　　価　1部200円

●第一部「和解への課題」

東京国際ダイアローグ '96レポート①

『和解と共生への課題』

An Agenda for Reconciliation and Kyosei

●1996年5月20日　●日経ホール

去る五月二〇日（月）、東京・大手町の日経ホールに於いて、東京国際ダイアローグ'96（主催：経済広報センター、国際MRA日本協会、尾崎行雄記念財団、後援：文部省、外務省、総合研究開発機構〔NIRA〕、ジャパン・タイムズ）が開催されました。

昨年に引き続き『和解と共生への課題』をテーマに開かれたこのダイアローグには、駐日各国大使・外交官、ジャーナリスト、政治家、政府各機関ならびに教育、NGO関係者等、約三〇〇名の方々が参加しました。

今回のニュースでは、当日前半に行われた、第一部「和解への課題」の模様をレポートしたいと思います。

第一部「和解への課題」

対立する者同士の『和解』と異なる者同士の『共生』

東京国際ダイアローグ'96は、栗田武雄経済広報センター常務理事・事務局長の次の挨拶で幕を開けました。「対立する者同士が和解し、異なる者同士が共生することが、平和と繁栄の実現に向けての第一歩であり、究極の目標です。モラルの確立と共有、政治のリーダーシップの確立、繁栄に向けての経済の活性化と共に、この（和解と共生という）問題については、言論、思想、政治、経済、多方面からの総合的なアプローチも必要であると考えられます。本日の討議が実りある成果を生み、それが問題解決への次のステップに対する大きな支えとなる事を期待いたします。」

続いて、コー五〇年の歴史を綴ったビデオ『和解と信頼醸成の半世紀』が上映された後、このダイアローグの為にスイスから来日したマーセル・グランディーMRAコー財団理事長と、一九五〇年代前半に、国会議員、経済人、労働組合代表等からなる代表団の一員として、アメリカ・マキノ島やスイス・コーで行われたMRA会議に参加した事をきっかけに、以来四十数年間にわたりMRAに関わってこられた、今年数えで百歳を迎える加藤シヅエ元国会議員が基調講演を行いました。（以下、発言は全て要旨）

基調講演

マーセル・グランディー
（MRAコー財団理事長）

グランディー氏はコーを中心に、アフリカや旧東欧における紛争解決や信頼醸成に携わり、またキプロスにも三十五年間駐在し、中東和平に貢献してきました。

そうと決心しました。廃墟と化したヨーロッパで、昨日まで敵だった相手との関係を修復できる場所です。

コーのパレスホテルが売りに出されており、九十五名のスイス人が大きな犠牲を払って、そのホテルを買い取り、修復しました。今でもはっきり覚えていますが、時計工場を営んでいた両親は、『世界のための家』を買うために我が家を建てるのに積み立ててきたお金を全部使っても良いか、と兄と私に尋ねました。私どもは大賛成をしました。両親は借家で最期まで幸せに暮らしました。

戦後一九四六年から一九五〇年までの間に、およそ五〇〇〇人のフランス人とドイツ人がコーに集まり、和解の道を歩み始めました。中にはドイツのアデナウアー首相、またフランスのロベール・シューマン外相もおられました。それまでの七十五年間に普仏戦争、第一次世界大戦、第二次世界大戦と、三回の戦火を交えた国家間のこうした和解の第一ステップが、新たな戦争を防ぐ為に重工業を共同運営するというシューマン・プランへとつながったのです。このプランは民主ドイツの建設をもたらし、また欧州諸国のより緊密な統合のための軌跡となりました。

『世界のための家』コー

「和解のセンターとして設立されたコーは、今年の夏に五〇周年を迎えます。

第二次世界大戦が終わり、戦争に巻き込まれずにすんだスイスは、国外に目を向けました。周囲の国々は荒廃し、制度や秩序は完全に崩壊しておりました。スイス人は、MRAが平和作りへの拠点を提供することの出来る場所を探

コーで育まれる和解の精神

『和解』、これはコーの一貫しての象徴です。毎夏、危機や紛争状態にある国々から男女が集まり、危機の克服あるいは防止に関する経験を分かち合います。地球の様々な地域からの人々、あるいはかつて敵同士だった人々が、共通の優先課題を見いだすこともあります。

たとえばソマリアの例がそうです。ソマリア人のグループが今年の夏、再びコーに集まります。ソマリアから来る人もいれば、亡命先の国から来る人もいます。彼らは分断した三つの部族の代表です。戦争によって引き裂かれた母国のために、統一と平和という基盤に立った話し合いが持たれるのは、これで三回目になります。

彼らが初めてコーに到着した時、或る大学教授は『我が国民は床に砕け散ったガラスのようにバラバラになった。私は絶望で体の力が抜けてしまった』と言いました。彼らは何時間も膝を突き合わせて話し合いましたが、その結果ついに、それぞれが新しい気持ちで他の部族に話しかけようと決心しました。母国への愛によって互いの相違を克服すべきだ、というのが結論だったのです。今夏も、このソマリア人グループは、母国における和解案を練り続けます。

『あなたの敵を許すことができますか？』それが、いまロシアで一番重要な問いなのです、と最近モスクワで或る有名な評論家が言いました。もし敵を友人にしようとするなら、意識の改革が必須であり、これこそコーで強調されていることなのです。

●和解の道を模索するソマリア各派の代表

スイス人として

これは、母国スイスを愛するがゆえに申し上げるのですが、たしかに私どもは生き方を考えねばならない国民です。伝統的な価値や行動のための理念の多くを失い、自分の幸福、自分の安全保障、また自分の富を守ることに営々と力を注いでおりますが、事態は悪化しています。失業、汚職スキャンダル、若者の退廃、麻薬中毒といった問題を抱えています。自己利益にこだわってきたために、自分たちが欧州に対して成し得る、最良の貢献を果たすことが出来ませんでした。このような理由から、私はコーがスイスにあることをありがたく思っているのです。コーは、新しい国際環境の創造に貢献するという、スイスに与えられた真の使命を象徴するものです。

自分を見つめ直すこと

コーは、善と悪の闘いを認識させてくれますが、それは世界における善悪だけではなく、一人ひとりの人間の心の中の善悪についても言えます。毎日、自分をみつめ直し、変わっていかなければなりません。心の中の善悪は道徳的基準によって見極めることが出来ます。この点で私は、自分が耳を傾け、その命令に従うことの出来る、『心の声』に助けられているのです。自分が間違っていた点を妻に対して認め、許しを請わねばならないことは日常茶飯事です。妻が私に対して同じ事をすれば、夫婦の間に安らぎが戻ります。過去を癒すとは、時に、現在をも癒すことを意味するのです。

異文化を超えて

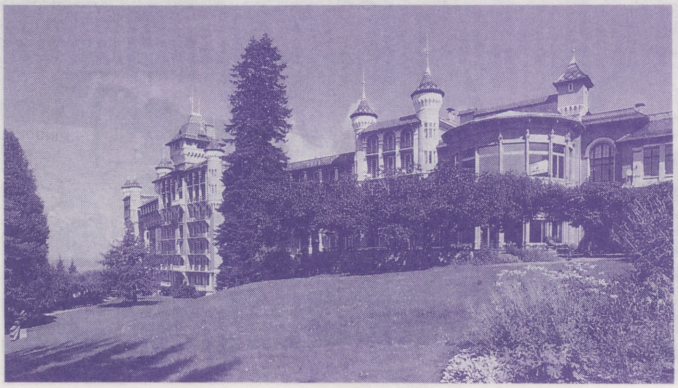
最近否応なしに私どもに課せられた問題の一つは、異なる文化や宗教を持つ人々の対話を行うことです。アメリカの政治学者、サミュエル・ハンチントンは『文明の衝突』の中で、文化と文化のぶつかり合いの中に、将来の世界紛争の根源をみています。しかし五〇年にわたるコーの経験は、異文化間に効果的な協調が存在しえることを示しております。それぞれが、自らの変化の体験をふまえて『心の声』に耳を傾けることによって、異なる文化や背景を持った人たちの間に信頼が醸成され、協力しあえる関係が生まれるのです。

国内及び国家間の分極化が進み、分裂が一般的になっている世界の中で、私たちや私たちの国家には、新しい価値を受け入れ、それらを適用する事が求められています。人生の真髄は物質的な成功にあるのではなく、何かをしたいという新たな熱意を持つ事にあるのだということを示さなければなりません。

過去を癒し、未来を創り出す

日本には偉大な使命があります。経済発展の中心は、西洋からアジア・太平洋へと移りつつあります。この地域で起こっていることに、世界は益々目を向けています。日本の古い文化、長年培われてきた伝統、そして大いなる経済的潜在力によって、皆さんは過去を癒し、未来を創り出すことができるのです。皆さんが、この高邁なるビジョンをもってそれを成し遂げる上で、私どもも何か協力できることがあれば非常にありがたいと思っております。」（終）

●62カ国から約680名が参加した「平和の創造者」会議


●MRA世界会議場、コー・マウンテン・ハウス

基調講演

加藤シヅエ（元国会議員）

加藤シヅエさんは日本で初めての女性議員として、一九四六年以来、戦後の賠償計画・日韓関係正常化など、アジアとの和解や信頼醸成に先駆者的役割を果たしてきました。

日本初の女性国会議員に当選

「戦後、皆様のご支持により、国会議員の第一号として議席を頂きました。その時、三十九名の女性議員が出現したもので、一体どなたが一番驚きになったかというと、それはマッカーサー元帥でした。どこの国にも、三十九名の女性が一度に当選するなんて、その頃には無かったものですから、大変なことだといって、驚いたり、喜んだりしてくださいました。

そのうちに、元帥は女性議員三十九名を総司令部にご招待くださいました。その時分に、元帥からご招待をいただいてお目にかかるということは、それはもう大変な光栄でありまして、みんな喜び勇んでお伺いいたしました。

元帥は私たちにおっしゃいました。『あなた方日本の女性が本当に優れた女性であるということを、私はかねがね各方面から聞いて知っている。けれども、あなた方は今日、国会議員として当選したのだから、今度は家庭とか子供とか家とか、そういうことに限らず広く世界を観て、そして国全体を観て、その為にお役に立つという風に、広く窓を開けて広く世間を観て、そこに全部思いを致して、学んで、そうして務めてください。それが婦人議員の役目ですから、それを考えて下さい』とおっしゃいました。

私も、『はあ、なるほどそうだ、これからは家庭のことだけを思っている女であってはまだ足りないので、広い広い国のこと全体、そして出来れば外国のことをも考えながら働かなければいけないのだ』ということを心に命じて理解いたしました。

気づかなかった自分の傲慢さ

しかし本当のところ、私の心はどうであったかと言いますと、そういう色々ごもっともな話を伺って、そうだそうだと自分では分かったつもりでいましたけれども、やはり根が傲慢な性質はなかなか抜けないものらしく、自分は婦人議員に当選しているんだから、まあ普通の女性達よりも、ちっとばかり偉いんじゃないか位にどうしても思いこんでおりました。そして人を見れば、先ず欠点を見て、それをどうしたら良いか、国会で何をしたら良いかと考えておりました。当時は吉田茂さんが総理大臣でいらっしゃいましたが、私は毎朝新聞を見て、吉田さんがどんなまずい事をしたか、どんな変な事を言ったか、先ずあら探しをして、そしてそれを国会で質問してやろう、なんてつまらないことを考えておりました。そのような誠に小さな考えしか持っていない、心の狭い議員であったことに気が付かず、自分では相当な人間だろうと評価していたところ、アメリカのマキノ島で開かれたMRAの大会に呼んでいただきました。

MRAの国際会議に参加

会議場に着いた私は一所懸命、毎日のミーティングに参加しました。そうしたら、どのミーティングも、世界の政策とか国際関係の話なんかひとつもなさらないんです。仲良くするには、自分たちの国がどこを反省して、相手のどこを理解したらいいのか、ということを胸襟を開いて話しあうのがMRAのミーティングであり、そう

●アメリカのマキノ島やスイスのコーで開かれたMRA会議に出席した、広島・長崎の両市長、国会議員、経済人、労働組合代表等からなる代表団［1950年］

いうことを伺って私はびっくりしてしまいました。ここに来たら、いろいろな政策なんか聞いて賢くなれるかと思っていたのに、こんなことを聞いて一体賢くなれるのかしらと疑問に思いました。『私は社会に尽くすために、まず自分の心をきれいに掃除しなければならないということを考えて、今日あえてみなさまの前で、こうしたことを申しあげて、決意をあらたにいたしました』、そういうお話を次から次へと伺いました。

自分の過ちを心の底から反省

私はその中におりまして、じーっと伺っていて、私はどうなんだろう、私は随分反省しているつもりだけれども、よくよく絶対の正直ということで自分の心の中をきれいに洗ってみると、あることに気がつきました。

私は義理の娘に対して、親として躾は十分に出来るけれども、母性愛なんてものは生んだ娘でなければ無いんだと自分の心で決めて、それが正しいと思いこんでおりました。その為に、その娘が少しぐれておりました。私はそれを考えて、ああやっぱり私が悪かったんだ。母親という立場になった以上は、義理であろうと実の娘であろうと、向こうが要求しているのは躾ではなくて先ず愛情である、その愛情を私は与えようとしなかったということは、本当に私の誤りであった、としみじみ心の底から反省いたしました。くやしいけど、やっぱり私もこういう事が間違っていたということを反省致しましたと、ミーティングで皆様に申しました。

私はその時、まるで自分のお葬式を自分でそこで出したような、そんな気持ちになりました。私があんまり哀れな顔をしていたもんですから、ある方がマンドリンで愉快になるような音楽を弾いて、会場の皆様の気分を引き立てて下さいました。それで私もやっと涙を拭って、やっぱりMRAの言っているような標準——正直や愛情というものがなければ人は育たないものだということがしみじみと自分でわかりました。

人は変わることが出来る

皆様、本当に人は変わることが出来ます。変わると、どんなに楽しいことであるか——毎日反省して新しいことを学んで、そうして感動しながら、ああ、今日はこういう事を聞いた、なるほど良いことだ。ああ、これはお気の毒な話だ、本当にこういう方を助けてあげなくちゃならない。ああ、これは美しい野の花で、野の花は種がこぼれていれば、自然にでも、こういう美しい花がさく。自然の力というのは偉大だな。こんなことを考えたり、あるいは今日では、もう狭い国際関係ではなくて、宇宙全体のことを考える人間として、それにどうやって尽くすことが出来るかを考える——。変わると、人は成長することが出来ます。

●コーの中庭でインド、パキスタンからの参加者と談笑する加藤シヅエさん(左端)[1951年]

幸せな長生きの秘訣

人は反省して、きれいな心で成長して、そして人様に何か自分の小さいことでも、出来る範囲のことを愛情を持って正直に一所懸命努力をして生き続けるということをいたしますと、なんと知らないうちに百歳まで生きてしまうというわけでございます。私は皆様から聞かれる度に、百歳まで生きる秘訣は『感動して何かお役に立つことを一所懸命する、そして人様からも喜んでいただく、自分もそれによって成長する』ということだとお答え申しあげております。こういう生き方が本当に健康で幸せな長生きの秘訣であり、それには『感動する』『心をきれいにする』ということから始めるのでございます。MRAの方々の献身的なご協力によって、私は今日も幸せな、自称現役政治家、百歳のおばさんとして生きながらえております。皆様どうもありがとうございました。」(終)

パネル・ディスカッション

テーマ「和解、予防・仲介外交と日本の貢献」

続いて、羽田孜、鳩山由紀夫、武者小路公秀、相馬雪香の四氏による、パネルディスカッションが行われました。

羽田　孜（元首相、衆議院議員）

「今こそ、私たちは紛争を未然に防がなければなりません。予防的な外交、あるいは貧困問題解消のための開発等について、各国が努力をしていく必要があると思います。

日本は資源の無い、しかし人口は大変多い国です。この国がここまで繁栄できたというのは、やはり世界の皆さま方が、理解を示してくださったからではないかと思います。また、日本は――いろいろと議論はありますが――平和憲法というものを持つ国なのです。

資源の欠乏を克服して生きていかなければならない国として、そして平和憲法を持つ国として、日本はこれから、自分たちに出来得ることについて、より積極的に対応していかなければなりません。世界が平和であるから生きていけるのだということを、しっかりと私たち国民全体が知らなければならないと思うのです。そのことを知り、覚悟さえ持つならば、日本はたいへん多くの事が出来ると思います。

宮沢賢治の心

ここに、宮沢賢治のお弟子さんによって書かれた『土に叫ぶ』という本があります。この本の中に書かれている宮沢賢治の歌をご紹介したいと思います。

野原の松の蔭の
小さな萱ぶきの小屋にいて
東に病気のこどもあれば
行って看病してやり
西につかれた母あれば
行ってその束を負い
南に死にそうな人あれば
こわがらなくてもいいといい
北にけんかやそしょうがあれば
つまらないからやめろといい
ひでりのときはなみだをながし
さむさの夏はおろおろあるき
みんなにでくのぼうとよばれ
ほめられもせず　苦にもされず
そういうものに
わたしはなりたい

宮沢賢治
（傍点・編集者）

いま宮沢賢治の考え方や行動というものを、改めて、日本の多くの人が見るようになっていますし、また外国に於いても、この宮沢賢治が論ぜられるようになっております。私が申し上げたいのは、日本人には昔からそういう心があるんだということです。

もうひとつ、結婚式のお祝いに私がいつも読む、吉野弘さんの歌をご紹介したいと思います。

二人が睦まじくいるためには
―中略―
互いに非難することがあっても
非難できる資格が自分にあったかどうか
あとで疑わしくなるほうがいい
正しいことを言うときは
少しひかえめにするほうがいい
正しいことを言うときは
相手を傷つけやすいものだと
気付いているほうがいい

このように宮沢賢治の心というものは、今の新しい結婚のお祝いの歌の中にも、活かされているのではないかと思います。私はこの歌を少し直して、日米農産物交渉、あるいはガットの交渉の時に、マイケル・スミス、クレイトン・ヤイターといった人たちに差し上げたことがあります。いずれにしましても日本人は心の中に、そういうものを潜在的に持っているのであり、それを活かさなければならないと思っております。」（終）

鳩山由紀夫（衆議院議員）

「経済至上主義というものは、戦後国家の経済的な繁栄には役だったわけですが、残念なことに、もっともっと大事な道徳的価値観―私は美的倫理観という言葉を使わせて頂いているのですが、そういった精神的な価値というものを失わせてしまいました。私はそれを、何よりも寂しいことではないかと、最近しみじみ感じておりましたが、そんな中で出会ったのが〈友愛革命〉という思いでありました。友愛というのは、欧州統合のバイブルといわれる『パン・ヨーロッパ』を著したオーストリアのクーデンホーフ・カレルギー伯の言葉であります。

友愛精神

『〈自由〉そして〈平等〉という二つの概念は立派なものである。しかし今日的な政治のように、自由をとるか、あるいは平等をとるか、という議論になると、自由が過ぎれば平等というものがおかしくなって弱肉強食的になり、また平等が過ぎてしまうと、今度は自由というものが窒息してしまう。このそれぞれに正しい立派な二つの概念を、よりバランスをとって結んでいく架け橋が必要であり、それこそが〈友愛〉という精神である』このようにカレルギー伯は申しますし、私も全く同じように考えます。

自己の尊厳の尊重

友愛という思いを実現させていくのは、そんなに簡単ではないことを私も実感しております。

一番大切なのは、自己の尊厳を尊重することが、友愛という理念を成就させていく原点だということです。自分自身が嫌いで、自分を決して愛していないで、『あなたを愛します』とプロポーズされても、決してそのプロポーズは相手の心に響かないだろうと思います。自分自身にそれなりの尊厳というものを持ったときに初めて、相手と意見が違っていてもその違いを認め、相手を信頼し、相手に愛というものを芽生えさせていくことが出来るのではないでしょうか。従って、自己の尊厳というものを尊重することによって、友愛という精神が生まれ、それを広げていくことが、共生（共に生きる）という理念に結びついていくのだと思います。別の言葉で言えば、友愛というのは自愛（自分自身を愛する）、そして利他（他人のために行動をする）、この二つを包含する概念でありましょう。

このようなデュアル（二つの）メッセージが、これからの社会、また政治の中で生かされて行くべきだと私は思いますし、自分自身を愛する自愛という言葉は、さらに簡単に言えば、もっともっと個としての存在を認めるという意味における、市民益というような方向に向くべきでしょう。そして共生という概念を拡張させていけば、地球全体の利益――地球益という言葉にぶつかるのではないかと思います。私は、政党の利益、地域の利益、あるいは国益というようなものを超えて、市民益と地球益というデュアルメッセージを求める政治を目指して参りたいと考えております。

人間の安全保障

武力による安全保障以上に、私ども、日本人として血を流すことがあるとすれば、同じような共生の理念・友愛の理念から、いま人間の安全保障こそ、日本が率先して世界に向けて発すべき言葉、いや言葉以上に行動ではないかと思っております。難民、エイズすなわち病の問題、あるいは人口、食料、環境、貧困、こういった世界的な大きな問題に対して、日本が言葉では無く、むしろ行動で指導的な立場を示していくことが、大切な日本の行うべき役割ではないでしょうか。（終）

●羽田氏と鳩山氏

武者小路公秀

（明治学院大学教授）

「紛争をいかにして解決していくかという事を学問的に考えていくと、二つのスタイルがあることに気がつきます。それはアメリカと日本の交渉の研究をしている中で気づいたことなのですが、アメリカまたはヨーロッパの方たちは、いつも正しいものを選び取ろうとし、また相手に対しても『これが正しいのだから、これを選ぶことが合理的である』、あるいは『得になる』と言い、とにかく選ぶことを大事にします。それに対して、日本人あるいはタイ人のような稲作民族は、選ぶということよりも、相手に合わせていくということを中心に話を進めていくのではないかと思います。

『合わせ』を活かす

実は、いろいろな紛争を解決するときに、『これを選びなさい、これが正しいのだ』と言うよりも、むしろお互いに相手に合わせるという下ごしらえをすることが、大事なのだという感じが致します。したがって、合わせるということを大事にすることにより、いろいろなところで日本が和解に役に立つことが出来るのではないかと思います。

しかし外国の方からは、『日本人は合わせるばかりだ』と余り評判が良くありません。確かに合わせ過ぎるのも、また良くないという感じが致します。ただいい加減に合わせるだけではなくて、本当に内容がある形で許しをこう、そして許すというような合わせ方が大切であろうと思います。

アメリカが中国に対して、知的所有権や人権の問題でやっているように、『とにかくこっちは正しいんだから、お前も従いなさい』というように、相手に選択を迫るという事はとても困るのですが、しかし、やたらに合わせてしまうという事にも、まずい点があると思います。そこで、この日本的な合わせというものを、どのようにしたら活かせるのかということを、皆さんに問題提起したいと思います。

例えば、従軍慰安婦問題についての、これは曖昧さというものの中で、とにかく気の毒だから基金をつくってお手伝いしようというのは、決して悪いことではないと私は思います。しかし、問題をはっきりさせずに、とにかく気の毒だからということで皆で合わせていくのではなく、やはり筋を通して、日本が悪かったということをはっきりさせ、国家の立場で賠償する、しっかりと片方で筋を通した上でもう片方で合わせていく、というように『合わせる』のと『筋を通す』のを区別しなければならないのではないかと思います。

●発言する武者小路氏

勇気をもって許しをこう

その点で、勇気のいる事をしっかりと実行する、つまり自分が悪かったと言い、許しをこうという事が、合わせがいい加減にならない為の一番大きな課題となります。日本で今、問題となっているのは、許しをこう事をはっきりさせるか、それともごまかすかということです。日本が悪い事をしたということを認めてしまうと角が立つ、という問題が国の中でありますが、角が立ってもやはり許しは請わなければいけない、という勇気が必要な時期に我々は来ているのではないかと思います。

合わせるというのも、相手の立場を大事にするという意味で合わせるのは良いのですが、残念ながら、日本の政治は具合が悪いから何とか妥協しようという合わせを、近頃、やりすぎている感じが致します。そういう意味で皆さんには、合わせが変なことにならないためにはどうしたらいいのか、また本当に許しをこうという気持ちをどうしたら大事にできるのか、という問題を第二に提起したいと思います。」（終）

相馬雪香

（尾崎行雄記念財団副会長）

「先日、私の父が書いた古い原稿を読んでおりました。それは昭和二〇年、ドイツが降伏して間もない頃に書かれたものでした。

『この戦争が終わったらば、戦争の真因をまず突き止めなければならない。（中略）日本の国民に是非言いたいことは、二つのことに気をつけなければならないということだ。第一は世界知識が無いということ、第二は驕慢になってはいけないということ。』

●相馬雪香氏

五〇年立ちました今日、いかにも情報が一杯あるようでありながら、実際には本当の情報を見る目が、聞く耳がありません。そして世界に通用することを語る言葉がありません。いつの間にか、言わなければならないことは言わずに、聞かなければならないことは聞かずに、そして見なければならないことは見ずに、ごまかしをしている。

『合わせる』前にごまかそうとする、その心根を、この際どうしても洗って始めなければ、明日の日本はありません。アジアの中の日本として何ができるかを、いま考えていかなければならないと思います。日本がするべきことは、アメリカ式に相手に強要することでもなければ、日本式にごまかすことでもありません。私たちは、新しい道を模索していかなければならないのです。

とくに、今日ここにお集まりのジャーナリストの方々、論説をお書きになる方々には、日本が明日の二十一世紀に向かうため、世界が求めている倫理性のある国のあり方について、ぜひ筆の力を使っていただきたいと思います。」（終）

コー五〇周年記念基金に対するご協力への御礼

去る六月八日（土）に文京区の汐見会館にて、MRA関東地区女性の会主催により行いました、スイス・コー五〇周年記念世界大会支援バザーは、天候にも恵まれ、お陰様にて大盛況の中に終えることが出来ました。

多くの方々のご協力も賜り、予想を上回る純益十五万円余を得ることが出来ましたが、ご寄付の方も現在三十五万円が、皆様の暖かい気持ちの溢れるお手紙と共に寄せられております。

なお集まりましたお金は、八月上旬より、このコーの記念大会に参加される国際MRA日本協会の榊たか子理事より、コー五〇周年記念基金の代表にお渡し頂く予定です。

皆様のご協力とご厚意に改めて心より御礼申し上げますと共に、コーの五〇周年記念世界大会が意義深いものとなりますようご一緒に祈念致したいと存じます。

MRA関東地区女性の会　代表　藤田寿子

●コー・マウンテンハウス

武者小路氏、相馬氏の発言を受け、最後に羽田氏、鳩山氏が次のように述べて、第一部は終了しました。

羽田　孜

「やはり歴史というのは非常に大事であります。しかし、第二次世界大戦において、日本がどんなことをしてしまったのかについて、ほとんどの人はきちんと理解していないというのが現実です。こんなことをやっていると、結局また再び同じ過ちを犯してしまうことになると思います。その意味で、やはり歴史というものを本当に真正面から振り返り、そして相手の人たちとも真摯に話し合いながら、その真因はなんだったのかを突き止めることが大事であろうと思います。

ですから、政治家どもがやるよりも、それこそ冷静な学者の皆さん方、しかも一国ではなくて多国の皆さん方が、いろいろな角度から議論していくのが良いと思います。しかし『そんなことをやったって、誰も感心なんかしないよ。それに、例えば、かつてのアメリカやヨーロッパの奴隷の問題なんかはどうするんだね』と言う人がいます。それに対しては、私は、『どんどん議論していけば、その昔の問題にまで巡りついて、そこに人類の本当の意味での和解というものが生まれるんじゃないのか』ということを申し上げました。

いずれにしましても、きちんと真正面から歴史を省み、そして過ちは正面から詫びることに誇りを持つことが大事であろうということを、改めて、いま先生方のお話をお聞きして感じました。」（終）

●発言する羽田氏

鳩山由紀夫

「合わせることの難しさ、だけではなく、一度決めたらなかなか変えられない難しさ、という二つの難しさが日本にはあると思います。合わせる時は、相手に自分の意見を余り表明せずに決めてしまうのですが、しかし、行政などで一度決めたものを直そうとすると、もの凄いエネルギーが要ります。

これは、両方とも裏・表であり――私は、先ほどから友愛という言葉で申し上げているのですが――自分自身に対する自信の欠如から来るものなのではないでしょうか。本来ならば、特に初等・中等教育でしっかりやらなければならない、自分の意見というものを発表する、相手とことん議論を闘わせる、というディベートを日本ではほとんどやらないまま成長させてしまっています。自己表現をする場が大人になるまで――ある意味では大人になっても――無いというのが、今までの教育環境です。

これがどうも国会の中にも蔓延してしまい、言論のない言論の府となっているのではないかと思います。この事が、相手と意見が違うと、相手の人格までも見下げてしまうというか、軽蔑をしてしまうことになるのではないでしょうか。欧米の方々は、相手と意見をとことん闘わせながら、最後には、にこやかに握手をして、お互いの人格の素晴らしさをほめ合うということが出来ると思います。しかし日本人はなかなかそれが出来ず、意見が合わないと嫌いになってしまいます。

ここがどうも原点なのではないかと思いまして、その意味で私は、友愛という言葉、自己の尊厳というものを尊重することによって、相手との意見が違うことも認め合い、信頼し合い、そこに愛を芽生えさせるというところまで、日本人が意識改革をする必要があるだろうと考えます。それを、出来れば政治の世界で、あるいは宗教の世界で、マスコミの皆様方の筆の力により、そして社会的に大変な事業をなさっておられる加藤先生、相馬先生のような方々のお力で成し遂げていくべきではないかと思っています。」（終）

コー円卓会議 中間会議レポート

●ワシントンの夕食会で講演するローレンス・サマーズ財務副長官

コー円卓会議（日米欧経済人円卓会議）中間会議は、去る四月九から十二日にかけてアメリカのワシントンとニューヨークで開催された。「グローバル経済における、原則あるビジネスのリーダーシップ」というメインテーマで開催された今回の会議は、最近アメリカで急増している企業倫理の啓蒙や実践に取り組む十二の団体の協力で開催された。

ワシントンでは「コー円卓会議『企業の行動指針』をグローバル経済の挑戦の中で如何に適用するか」というテーマでのシンポジウムが開かれた。世界的な公認会計会社のドミニク・タランチーノ氏（プライス・ウォーターハウス・WG会長）はグローバル市場の透明性、法体系整備、ガヴァナンスの確立が急務であることを強調した。また世界的な反汚職ネットワーク「トランスペアレンシー・インターナショナル」米国代表のナンシー・ボスウェル氏は、国際企業、国際機関と途上国政府との協力による、汚職に対する建設的取り組みの動きを報告した。企業の倫理問題が相次いだアメリカでは、近年 Chief Ethics Officer（最高倫理責任者）という副社長クラスの職を設ける企業が増え、既にフォーチュン誌企業の二〇〇社以上がこの制度を設けている。事件発覚後の対応やチェック体制の確立に留まらず、社員教育プログラム、倫理的土壌を育む企業文化の形成など予防外交的対応も行っている。

「第五種企業―これからの企業経営の理念」というテーマで講演したキヤノンの賀来龍三郎会長は、企業の役割の進化論を展開し、世界規模で社会的責任を果たす第四種企業の役割に留まらず、これからの企業は世界の変革に取り組む役割を果たしていく第五種企業を目指すべきことを提唱した。

特別ゲストのローレンス・サマーズ財務副長官（元ハーバード大学教授）は、現在がルネッサンス時代や産業革命に匹敵する変革の時代であり、リーダーシップ抜きで世界の諸問題の解決はありえないとして、あるべきビジネス・リーダーシップへの強い期待を寄せた。

ニューヨークで「ベビーブーム世代の終焉が、西側の社会保障システムに与える影響」というテーマで基調講演を行ったピーター・ピーターセン元商務長官は、先進高齢化社会における社会保障制度がもたらしている深刻な財政危機の実体を図表で表し、それに対する抜本的対策を提言した。

「国際金融市場は common good に貢献しているか？」というテーマで講演したニフコの小笠原敏晶社長（ジャパンタイムス会長）は、メキシコの通貨危機や、デリバティブのリスクの例に触れた上で、規制強化ではなく、各国の金融当局と企業が責任を遂行して対応する重要性を指摘した。

日本からはこの他、金子保久松下電器産業理事、高瀬保東海大学教授、塚田滋東芝アメリカ副社長が参加したほか、現地の日商岩井、東京三菱銀行、NKK、伊藤忠、安田海上火災、読売新聞、社会経済生産性本部の駐在員も夕食会等に参加した。

会議には有力な企業倫理の専門誌「Business Ethics Magazine」のマージョリー・ケリー社主が参加したが、同誌がコー円卓会議「企業の行動指針」を連載したことから、ホワイトハウスが「企業の行動指針」を取り寄せたことも紹介された。また昨年十月に江沢民主席他が出席して北京で開かれた「反汚職世界会議」で、アメリカのボブ・マックレガー氏（ミネソタ企業責任センター所長）が、「企業の行動指針」を紹介したことがきっかけで、中国最高検察院が最近中国語版を作成したことも報告された。（終）

MRAワールドニュース

世界のMRA最近の動き

◇南アフリカでMRA国際会議を開催

アパルトヘイトの傷が癒えぬ南アフリカにおいて、MRA国際会議・テーマ「過去を癒し、未来を築く」（四月四日～八日）が開かれました。マンデラ政権誕生後の南アで初めてのMRA国際会議となったこの会議には、南ア国内はもとより、二十二のアフリカ諸国、ならびに世界各地から、約二五〇名の参加者が集まり、いかに憎しみや心の痛みを乗り越え、新しい社会を築いていくかが話し合われました。

●南アフリカで開かれたMRA国際会議

◇ウクライナでセミナーを開催

政治家を志す二〇名のウクライナ青年が、五月初めに西カルパート山で開催された「冷戦以降の自由な社会に求められる青年政治家の資格」というセミナーに参加しました。このセミナーはFFF（＊）と、キエフの青年政治家の為の学校の主催により、政治の原則、信頼作り、汚職、ピースメーキング等をテーマに行われたものです。セミナーの開催にあたっては、ソロフ財団とキエフの英国大使館から多額の助成がなされました。数名のセミナー参加者は、コー世界大会に参加する予定です。

＊FFF（Foundation For Freedom）―旧社会主義国の青年達に真の民主主義を学んでもらう為につくられたMRA傘下の団体

◇ジンバブエに新MRAセンター誕生

ジンバブエでは、ここ数年、中学生のためのMRAキャンプを開催しています。今では多くの中学校が、このキャンプを、社会に求められるリーダーシップを養成するものと重視しており、今年の一月から三月にかけてハラレやグウエルで開かれたキャンプには、週末毎に、数校から生徒が参加しました。ジンバブエのMRAフルタイムであるシバレ夫妻は、このようなニーズも考慮し、昨年購入した、ハラレ市街の中心部より車で十五分位の所にある十二エーカーの土地に、宿泊設備も整ったMRAセンターを設立しました。

◇MRAのホームページを開設

MRAの活動や、各国のMRAセンター、ならびにコー五〇周年記念世界大会を紹介するホームページが開設されました。アクセス・コードは、http://www.mra.org.uk/です。このホームページでは、レックスデリー氏著「MRAの発見」の一部も読むことが出来ます。

イギリスMRAが発行する月刊誌「フォー・ア・チェンジ」の記事や写真は、http://www.mra.org.uk/fac/、オーストラリアの若手が編集する「グローバル・エキスプレス」は、http://www.ozemail.com.zu/~jmchong/netc1.htm.でご覧になれます。（終）

▽事務局通信△

●コー五〇周年記念世界大会が、去る六月二十九日に開幕しました。MRA世界会議場コー・マウンテンハウスの設立五〇周年を記念して、特別のプログラムの下で行われているこの大会は、「五〇周年祝典（公式式典、感謝祭礼拝、記念講演など）」を皮切りに、「岐路に立つヨーロッパ」「未来を築く二十一世紀に備えて」「コー円卓会議」「産業人会議」「信仰、道義的価値、我々の未来」「和解への課題」「平和の担い手―女性によるイニシアチブ」の各会議、そして最終イベントのガーデンパーティーまで、六〇日間近くにわたって開かれています。日本からは約七〇名の方々が参加されますが、その体験や感想を聞かせていただく、コー五〇周年記念シンポジウム「和解の半世紀と共生の二十一世紀」を、八月二十九日（木）午後五時半より、芝浦のニラコ・ジャパンタイムズ・ホールで開催します。尚、詳細は事務局宛お問い合わせ下さい。

●次号のIMAJニュースでは、東京国際ダイアローグ第二部「共生への課題」をレポートいたします。